

山上憶良「思子等歌」の「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばま して偲はゆ」について

廣 川 晶 輝

一 はじめに

銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子に及かめ
やも (5・八〇三)

『万葉集』巻五には、山上憶良の次の作品が載っている。

思子等二歌一首并序

釋迦如来金口正説 等思_ニ衆生_一如_ニ羅睺羅_一 又説
愛無_レ過_レ子 至極大聖尚有_ニ愛_レ子之心_一 况乎世間蒼
生誰不_レ愛_レ子乎

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ い
づくより 来りしものぞ まなかひに もとなかかりて
安眠し寝さぬ (5・八〇二)

反歌

山上憶良「思子等歌」の「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして偲はゆ」について

本稿は、この作品のうちの長歌八〇二番歌の「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ」について考察する(一)。

詳しい考察に入る前に、「偲はゆ」について言及しておかなければならない。この部分の原文は、「斯農波由」であり、「しぬはゆ」と訓む。これについては、澤瀉久孝氏『万葉集注釈 巻第五』が、

ここには「農斯_ス」(八八三)、「斯農_ス」(八八九)、「都祢斯良_ス」(八八八)、「泊農_ス」(八九六)など、同じ作者がヌの仮名に用ゐてゐる「農」を用ゐてゐる。……ここは明らかに

シヌハと訓ましたものと思はれ、

と、山上憶良自身の他の作品における仮名表記に着目して指摘していたことが参照されよう。「農^ヌ」(八八二)は「主」であり、「斯^シ農」(八八九)は「死ぬ」であり、「都^ツ祢^ネ斯^シ良^ラ農^ヌ」(八八八)は「常知らぬ」であり、「泊^ハ農^テ」(八九六)は、「泊てぬ」である。澤瀉氏の指摘のように、「農」を「ぬ」と訓むことは動かない。

その「しぬは」の終止形は「しぬふ」であるが、この「しぬふ」について、右の『万葉集注釈』は、

ヌ↓甲類ノと変化した、その古い形を用ゐたものと思はれる。結句の「奈^ナ佐^サ農^ヌ」と共にこの作者の古語使用癖の一つと見られようか。

と述べている。この「古い形」「古語」という把握については、説の分かれるところである。試みに辞書の記述でも、『岩波古語辞典』(一九七四年二月、岩波書店)は、項目「しぬひ」の説明において、「シノヒの母音交替形」とし、

奈良時代にはシノヒとシヌヒとが並んで行なわれていたと指摘する^①。また、『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七年二月、三省堂)も、項目「しぬふ」の説明において、「シノフの転」とし、「考」の部分では、

甲類のノとヌに限らず、オ列甲類とウ列とは通じ合うことが多い。

と指摘する。「しぬふ」と「しのふ」とを通時的に捉えるか共時的に捉えるかは、このように説の分かれるところであるが、我々は、「しぬふ」と「しのふ」とを同列に扱って考察せねばならないと言えよう。

さて、「思ほゆ」の目的語は直上の「子ども」である。一方、「まして偲はゆ」の方の目的語はどうか。「まして」が「なおさら、いっそう」の意味であることを考え合わせれば、この「まして偲はゆ」の目的語も「子ども」であることは動かない。つまり、ここは、

瓜食めば 子ども思ほゆ
粟食めば まして(子ども)偲はゆ

と把握されよう。

さて、となれば、なぜ、瓜を食べるといつも子ども達^②のことが「思ほゆ」であり、粟を食べるといつも子ども達^③のことがいっそう「偲はゆ」と歌われるのか。この点は、従来、深く追究されて来なかった点である。近時の乾善彦氏「子等を思ふ歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第五卷』(二〇〇〇年九月、和泉書院)は、

……「おもほゆ」といい、さらに「ま・し・の・は・ゆ」という、その「思うこと」の強さが増して行く状況を考えねばならない。ここでの「しのはゆ」は、その「おもほゆ」ることが限定され深化した姿にほかならない。

と指摘し、「思ほゆ」「偲はゆ」の違いについて言及している。しかし、依然として、「瓜食めば 子ども思ほゆ」であるのに対して、「栗食めば まして偲はゆ」であることの説明は果たされていないと言えよう。

ゆえに、本稿は、この点に絞り、小考として報告するものである。

二 「しのふ」について

前節で確認したように、「しぬふ」を考えるうえで「しのふ」への考察が不可欠である。そこで、「しのふ」について確認する。

参照すべき先行研究として、内田賢徳氏「動詞シノフの用法と訓詁」(『上代日本語表現と訓詁』、二〇〇五年九月、塙書房。初出、「上代語シノフの意味と用法」、『帝塚山学院大学日本文学研究』第二一号、一九九〇年二月)がある。内田論

文は、

感覚にふれてくる周囲のものに触発された情緒の中での対象への思いということが、「偲ふ」を「思ふ」と分けている。

と指摘する。また、この内田論文をふまえる伊藤益氏「非在の構図——『萬葉集』巻十九、四二九三の論——」(『淑徳大学研究紀要』第二八号、一九九四年三月)は、

「しのふ」は、何らかの媒介物を介して情動が或る対象へと差し向けられること、すなわち、現に囑目の事・物を媒介として間接的に現に不在の対象が思念されることを表わすのを、その本来的な機能としている

と指摘する。この両論文の把握が基本となろう。

右の内田論文は、「しのふ」についての貴重な指摘を細部にわたって行なっている。内田論文は、「しのふ(しぬふ)」という歌語を考察するうえできわめて重要な論考であると判断されるので、しばらく内田論文の論述内容を追ってみなくてはならない⁽⁴⁾。

内田論文は「しのふ」の「そこにない人やものごとを思う」用法について説明するが、その例として、

大宝元年辛丑秋九月、太上天皇幸于紀伊国二時歌

巨勢山の つらつら椿 つらつらに 見つつ偲はな 巨勢の春野を（1・五四）

を採り上げ、「偲はれてあるものとしての春野」と「現に見ているところの秋の椿」という「二つの要素」を指摘する。秋の九月に巨勢山の椿を見て、春の椿を偲んでいるこの五四番歌は、「そこにはない人やものごとを思う」用法を確認するうえでの適切な例となっている。

内田論文は、続いて、

現に矚目しているもの（B）

そこに不在の思われているもの（A）

としたうえで、

Bを見てAを偲ふという文型

の存在を指摘する。また、「BがAの或る延長であるという關係をもつ」ことをも指摘し、その鍵語「延長」の内容として「提喻」および「換喻」があることを指摘する。

「提喻」の例として、

我が背子し けだし罷らば 白たへの 袖を振らさね

見つつ偲はむ（15・三七二五）

を採り上げ、Bとしての「白たへの袖」は、Aとしての「我が背子」の「卓越した部分」であると指摘する。つまり、こ

こに、BがAの「提喻」である点を見出すわけである。

一方、「換喻」の例として、

我が形見 見つつ偲はせ あらたまの 年の緒長く 我

も思はむ（4・五八七）

を採り上げ、

ものの名がここになくとも、偲ふことの媒介としての換喻的事物が示されていることは明らかであろう。

と指摘する。また、

秋萩の 上に白露 置くごとに 見つつぞ偲ふ 君が姿

を（10・二二五九）

を採り上げ、

「白露」も「君之光儀」（本文）に対して隠喩的であるより、露に濡れつつ帰って行った「君」に対して換喩的だとすべきであろう。

と述べている。右の記述にもあるとおり、この二二五九番歌の結句の「君が姿」の原文は、「君之光儀」である。この表記に対して、例えば、新編日本古典文学全集版『万葉集③』は、輝くばかりに美しい姿を表す漢語。

と指摘している。この指摘を考え合わせても、「白露」が、輝くばかりに美しい愛しい夫の姿の「換喩」であるとすると指摘

は首肯できよう。内田論文では、Bは「一般にはAに対して換喩の関係にある」とも述べている。「しのふ」を「Bを見てAを偲ふという文型」において理解する時、この「換喩」という把握は肝要な要素であると言えよう。

ここまで、内田論文の論述の内容を追ってきたが、さらに、当該歌を考えるうえでより重要な点に迫っていこう。内田論文は、

「見る」ことによつて偲ふことが触発されくるというあり方をもち

という点を確認しつつも、

我が背子が やどなる萩の 花咲かむ 秋の夕は 我を

偲はせ(20・四四四四)

山吹の 花取り持ちて つれもなく 離れにし妹を 偲

ひつるかも(19・四一八四)

などの例を挙げ、

「見る」が表現上顕在でないこともある

ことを指摘する。また、

年のはに 来鳴くものゆゑ ほととぎす 聞けば偲はく

逢はぬ日を多み(19・四一六八)

愛しと 思ひし思はば 下紐に 結び付け持ちて 止ま

ず偲はせ(15・三七六六)

秋風の 寒きこのころ 下に着む 妹が形見と かつも

偲はむ(8・一六二六)

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ……

(5・八〇二)

という例歌を挙げたうえで、

「見る」はこうした語彙、聞く、付く、着る、食む等の行為の連絡する感覚、聴覚・触覚・味覚などと相対的な視覚につながると言える

と述べつつも、続けて、

しかし、同時に「見る」は単に相対的な多に尽きない面ももっている。換喩的な関係が感覚を通して捉えられる

時、例えば「栗食めば」というそれは決して一般的でない。そこに偲はれるのは像としての子供であり、即ち見

られるべきものである。偲ふとは可能的な見ることであり、像は内部へと現れる。とすれば、それを触発するもの

の側で視覚は他に優位する中心であるだろう。見るこ

とと思うことの相関の一種にこの関係は属してもいる。

と述べている。内田論文の右の部分の記述は少々難解ではあ

るが、すなわち、「見る」ことが表現上に顕在していなくて

も、「見る」ことと深く関わってある「偲ふ」のありようを示唆していると言えよう。また、内田論文は、「子どもの像」が内部へと現れることを指摘しているわけであるが、「像としての子供」「像」が「内部へと現れる」時、これまで確認してきた「換喩」という肝要な要素が作用していると把握することが可能であろう。つまり、「像としての子供」「像」が内部に立ち現れる、その契機となるのが、「換喩」なのであろう。

B（栗）を見て食べてA（子ども）を偲ふ
この思考の通路が確保されるのも、栗と子どもとが「換喩」の関係にあると捉えられるからこそなのではなからうか。

三 栗の詠まれ方について

現代人の我々は、当該歌のように、「栗」が詠まれている歌に接した時、どのような栗のありさま（ヴィジョン）を思い浮かべるであろうか。一つだけで存在する栗のありさま（ヴィジョン）を思い浮かべるかもしれない⁽⁵⁾。しかし、当該歌の中の栗は、そのような栗なのであろうか。

そこで、『万葉集』中の「栗」の用例を見てみよう。当該歌以外の『万葉集』中の用例は、左のとおりである⁽⁶⁾。

那賀郡曝井歌一首

三粟乃（みつぐりの） 那賀に向かへる 曝井の 絶えず通はむ
そこに妻もが（9・一七四五）高橋虫麻呂歌集歌

松反り しひてあれやは 三粟（みつぐりの） 中上り
来ぬ 麻呂といふ奴（9・一七八三）柿本人麻呂歌集歌

また、『万葉集』以外の用例では、『古事記』（応神天皇条）の二例、

この蟹や 何処の蟹……木幡の道に 遇はしし嬢子 後姿は 小楯ろかも 齒並は 椎菱如す 櫛井の 和邇坂の土を 端つ土は 肌赤らけみ 下土は 丹黒き故 美都具理能（みつぐりの） その中つ土を かぶつく 真火には当てず 眉画き 此に画き垂れ……（四二番）

いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の 香細し 花橘は 上つ枝は 鳥居枯し 下枝は 人取り枯し 美都具理能（みつぐりの） 中つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を 誘ささば 宜しな（四三番）

がある⁽⁷⁾。また、『日本書紀』（応神天皇条）にも、
いざ吾君 野に蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道に 香

ぐはし 花橘 下枝らは 人皆取り 上枝は 鳥居枯ら
し 瀾菟遇利能(みつぐりの) 中枝の ふほごもり
明れる嬢子 いざ栄映えな(三五番)

がある(8)。

これらに見る「三つ栗の」とは、「中」を起こす枕詞であることは動かない。しかし、次の点も重要であろう。つまり、この枕詞のありように端的に示されているように、「イガの中に三つの栗が並んでいる姿、ありさま(ヴィジョン)」は、古代の人々の歌表現のあり方において一般的であった、ということである。

ここで、もう一度確認しよう。当該歌の「まして偲はゆ」の目的語も「子ども」であることはすでに述べた。つまり、ここは、

栗食めば まして(子ども) 偲はゆ
となる。「子ども」が「子ども達」という複数を表わすことは、注(3)で述べておいた。つまり、「イガの中に三つの栗が並んでいる姿」は、当該作品の中の「子ども達」という複数のあり方とすぐれて「換喩」の関係になり得ると言えよう。

四 瓜と栗

ここで、奈良朝当時の「瓜」と「栗」のあり方を確かめるために、関根真隆氏『奈良朝食生活の研究』(一九六九年七月、吉川弘文館)の記述を参照しよう。

関根書では、『大日本古文書』に見られる「瓜類」として、「青瓜」「菜瓜」「生瓜」「熟瓜・保蘇治瓜」「黄瓜」「冬瓜・鴨瓜」を挙げる。関根書は、これらの瓜それぞれがどのように数えられていたのかについても詳しい。

「青瓜」について、『大日本古文書 卷之十三(追加七)』^⑧(天平宝字二年六月二十一日〜八月二十二日、写千卷経所食物用帳)の「青瓜甘類」、『同』(天平宝字二年八月三十日、写経所解)の「青瓜一千八百三果」、『大日本古文書 卷之十一(追加五)』^⑩(天平勝宝二年七月二日、藍園瓜進上文)の「青瓜參佰貳拾丸」という記述をふまえて、
類(果)、丸と一つずつ数えられたのである。
と指摘する。

「菜瓜」について、『大日本古文書 卷之三』^⑪(天平勝宝二年七月四日、藍園熟瓜等送進文)の「菜瓜壹佰貳拾果」、『大

日本古文書 卷之七（追加一）¹²（天平十一年八月一日、写経司解）の「菜瓜四百六十八丸」などの記述をふまえて、

計量は果、丸単位で、一つずつ勘定している。と指摘する。

「生瓜」「熟瓜・保蘇治瓜」「黄瓜」についても同様に、計量は「顆（果）」や「丸」単位であり、一個ずつ数えていることを指摘している¹³。

一方、栗の方はどうか。関根書では、栗に「生栗」「干栗」があったことを指摘する。そして、計量については、『大日本古文書 卷之四』¹⁴（天平宝字二年九月、写経食物雑物納帳）の「栗六升」、『大日本古文書 卷之十三（追加七）』¹⁵（天平宝字二年六月二十一日～九月十九日、写千卷経所銭并衣紙等下充帳）の「二百冊文生栗三斗直」、『大日本古文書 卷之十六（追加十）』¹⁶（天平宝字六年閏十二月二日～二十九日、奉写二部大般若経料雑物収納帳）の「干栗子玖古受各一升」などの記述を参照し、

計量は石斗升合……を用いる。と指摘している。

つまり、瓜は一個ずつ計量されるが、栗は石・斗・升・合というように複数で計量されるというわけである。奈良朝当

時のこの一般的把握は、栗を複数で捉え子ども達との換喩の関係を把握する前節の把握と齟齬しないであろう。

五 まとめに替えて

もとより、本稿は、早くに金子元臣氏『万葉集評釈 第三冊』（一九四〇年一月）が、

甜瓜だの栗だのは子供の好物である。

と述べ、近時の井村哲夫氏『万葉集全注 巻第五』（一九八四年六月）が、

瓜はまくわうり。栗とともに子供の好物である。

と指摘することから自体を否定するものでは全くない。

本稿は、「瓜食めば 子ども思ほゆ」であるのに対して、「栗食めば まして思はゆ」であることの説明を追究してきたのである。「思はゆ」の「思ふ」について、前掲の内田賢徳氏「動詞シノフの用法と訓詁」が、

感覚にふれてくる周囲のものに触発された情緒の中での対象への思いということが、「思ふ」を「思ふ」と分けている。

と指摘し、また、その内田論文をふまえての伊藤益氏「非在

の構図——『萬葉集』卷十九、四二九二の論——」が、

「しのぶ」は、何らかの媒介物を介して情動が或る対象へと差し向けられること、すなわち、現に囑目の事・物を媒介として間接的に現に不在の対象が思念されることを表わすのを、その本来的な機能としている

と指摘することを基本的な把握に据えて、追究してきた。

当該作品の中には、「子ども」とあるように、複数の「子ども達」がいるわけであるが、その子ども達のあり方と、複数の「栗」のあり方とは、すぐれて「換喩」の関係になり得る。だからこそ、「栗食めば まして偲はゆ」と表現され得るのである。と述べてまとめたい。

なお、当該の作品では、「まなかひに もとなかかりて」とある。目と目の間のあたりにどうしようもなく掛かつて離れないのも、右の複数の「子ども達」であることになる。その子ども達の姿がまさに、目と目の間のあたりにうごめくのだと言えよう。

こうした作品世界の把握については、注(1)にも述べた別稿で論じることにした。

注

- (1) 「題詞・序文・長歌・反歌」という形を採る当該作品全体の理解については別稿を用意している。
- (2) 一九九〇年二月の「補訂版」においても同様の記述となっている。
- (3) 「子ども」の「ども」は、複数の接尾語であること、論を俟たない。
- (4) 内田論文で引用されている『萬葉集』の歌の表記は、基本的に内田論文の表記に拠り、内田論文で引用されていない題詞の引用は、新編日本古典文学全集版『萬葉集』（小学館）に拠る。
- (5) 甲南大学の講義「上代文学研究」にて当該作品を扱った折り、受講学生に、この歌の中で示されている栗のありさま（ヴィジョン）の絵を描いてもらった。受講学生の大半が、一つだけの栗を描いていた。
- (6) 引用は、新編日本古典文学全集版『萬葉集』（小学館）に拠る。
- (7) 引用は、新編日本古典文学全集版『古事記』（小学館）に拠る。
- (8) 引用は、新編日本古典文学全集版『日本書紀』（小学館）に拠る。
- (9) 一九二〇年三月、東京帝国大学文学部史料編纂掛
- (10) 一九一七年一月、東京帝国大学文学部史料編纂掛
- (11) 一九〇二年一〇月、東京帝国大学文学部史料編纂掛

- (12) 一九〇七年一〇月、東京帝国大学文科史料編纂掛
関根書は、「冬瓜・鴨瓜」について、計量は他の瓜と同じよ
うに「果」単位であることを指摘するが、多くの場合は
「現今の一切れ、二切れの〆切〆のような意味に相当」する
「割」などで示されていることを指摘している。
- (14) 一九〇三年三月、東京帝国大学文科史料編纂掛
- (15) 注(9)に同じ。
- (16) 一九二七年三月、東京帝国大学文学部史料編纂掛